

我が名は☒兇手☒ 其
は、貴方を殺す者の銘
也。

兇手に惹かれし者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マスター、それも断定遊戯派マスター専門のテイアン暗殺者のなもの。

目次

我が名は“兇手”。其は、貴方を殺す者の銘也。

1

我が名は「兇手」。其は、貴方を殺す者の銘也。

□とあるマスターの主観

「??マスター殿、お命頂戴致します」

気が付いた時には、全身黒づくめのその女は俺達。パーティーの前に居た。顔は、影の角度で見えることは出来ない。

「斥候」^{スカウト}のジョブも齧っている俺に、全く気が付かせることなく、ソイツは俺達に刃を向けていた。

「??ティアンの暗殺者か??」^{アサツン}

「左様。貴方に恨みはありません。されど、これも仕事故。大人しく、首を差し出してくだされ。さすれば、痛み目を見ることもございませぬ」

「??それなら、何故? 何故、俺たちを狙うんだ?」

そいつは、赤い手形の付いた黒い仮面を付けると、ナイフを構えた。

「兇手」。職業そのものの名を冠する暗殺者。

その存在を、その仮面をつけたティアンの暗殺者についてを、噂程度にだが聞いたことがある。

「貴方方は、ティアンを見殺しにして効率よく狩りを行った。それ自体に、拙せつが異議を唱えることはございませぬ。ですが、我が雇い主の少年が、貴方方の命を求めました」

「少年？」

「これ以上の情報提示はしかねます」

そう言つて、ティアンの女「兇手」は刃を構える。

「それでは、参ります」

俺達も、退くわけにはいかない。相手がティアンとはいえ、暗殺者風情だ。殺しても指名手配もされない。犯罪じゃないんだから、いつもとなんら変わらない。

俺は、仲間を掛けようとして、後ろを振り向き絶句した。

「プローイ??助け??て」

「な、なんで???!」

俺のパーティーメンバーであつた数人のマスターが、投擲されたナイフにより喉元を貫かれ、死亡していたのだ。

有り得ない。俺達は上級職のパーティーだぞ?それが、こんな簡単に??!

そう思う反面、この目の前に立つ存在が、噂に違わぬティアンで、暗殺者であるなら、

この惨状も納得出来てしまった。

「貴方はこのパーティのリーダーとお見受け致しました。貴方には、こちらの武器で死んで頂きます」

そう言つて女が取り出したのは、一本の直剣。鞘から抜き放ち、自然体で構えたその姿は、流星はティアンこの世界に生きるものといつたところ。マスターよりかは余程板に付いている。

だが、ここまででされて引き下がれるわけもない。絶対に殺す。

「分かつたよ、ぶつ殺してやらあ!!」

「??なるほど、マスターならば斯様な判断も容易、と。まだまだ学ぶことは多い」

余裕の雰囲気崩さず、女は俺を見据える。その余裕、いつまで続くか、見ものだ。

俺は、己の獲物であるTYPE：アームズのエンブリオ、「雷鳴戦斧 バアトチャク」を顕現し構える。

「いざ?!参る」

「行くぞ! 必殺、《振り割く雷鳴》!!」

上級職【バーリアン・ファクター 蛮 戦 士】の脅力に任せ突撃、バアトチャクを振り下ろす。これが俺のエンブリオが誇る必殺スキル、《振り割く雷鳴》。今まで、これを食らつて死ななかつた奴はいない。

それは、雷を伴つて暗殺者を襲つた。戦斧の一撃が地面を引き裂くかのように抉り取

り、さらに空から雷が追撃する。

これを喰らえば、ティアン最高峰の暗殺者と名高い「兇手」様も死ぬに決まってる。

「では、次は拙の番でございますれば??その腕、頂戴致します」

「は?」

しかし、暗殺者は死んでいない。

いや、それどころか全くの無傷であった。

「兇手」は、バアトチャクを握る俺の右腕を直剣で斬り捨て、俺を蹴り飛ばした。

「ぐあああ!」

訳が分からない。どうして、死んでいない。何故、無傷なんだ。俺と俺の上級エンブリオなら、NPC如き余裕で殺せるはずなのに!

「クソがああ!!」

俺は、半ば狂乱しながら、アイテムボックスよりジェムを五つ取り出す。これなら、こいつを消し去ることも容易だ!

「くそくそくそ、死ぬ!!」
「ジェム―《クリムゾンファイア》!!」

解き放ったのは、絶大な火力を誇る《クリムゾンスファイア》。それを五つ。

それは、忌まわしい“兇手”を目がけて襲い掛かり、着弾。紅炎と爆発を起こした。爆煙が晴れると、そこには人の影はおろかすすきりとした平地が広がっていた。

「や、やったか?」

俺は、警戒も払わずにその一点を見詰める。

??ふう、やつと死んだか。

今日は、疲れた。さっさとログアウトし

「いえ、拙はまだ死んでおりませぬ」

「ッ!」

その声に驚き振り向いた瞬間、

「——《兇手》デッドハンド」

「かひゅっ?!?!」

俺の首はズタズタに切り裂かれていた。

何が起こったのか理解出来ないまま、俺は死亡した。

【致死ダメージ】

【パーティ全滅】

【蘇生可能時間経過】

【デスペナルティ：ログイン制限24h】

□皇都ヴァンデル Heim 【兇手】ラ・モールⅡクリステア・デッドハンド

「??他愛もない」

刃を一振りし、鞘に納める。この剣は、我が依頼主である少年の物。返却せねばなるまい。折らずに済んで良かったと言えよう。

「??かふつ??」

未だ、拙には血統特殊技能^{スキル}《兇手》は荷が重い。

仮面を外し、裏側に付着した血液を服の袖で拭う。

「??我が父よ。クリステアは、ラ・モールに、デッドハンドの名を冠するに相応しい娘と

なれるでしょうか?」

いや、ならなくてはいけない。この【兇手】の務めを授かり、《兇手》を受け継いだからには、拙はこの命尽きるまで、業を磨かねばならないのだ。

そろそろ夜も更ける。ひとまずは、我が依頼主の元へ赴くのでしょうか。

拙は月明かりに照らされた皇都を、民家の屋根伝いに駆け抜ける。

——我が名は「兇手」。遊戯者^{マスタ}を殺す者也。